

受領No.1473

演劇を用いた科学技術コミュニケーション手法の開発および 参加者の先端科学技術の受容態度の変容に関する調査

代表研究者 種村 剛 北海道大学 高等教育推進機構 特任講師
共同研究者 藏田 伸雄 北海道大学大学院 文学研究院 教授
古澤 輝由 立教大学 理学部 特任准教授
原 健一 北海道大学 高等教育推進機構 博士研究員



Development of a communication method for science and technology using drama and research of the change of participants' attitude toward the acceptance of advanced science and technology

Representative Takeshi Tanemura, Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Specially Appointed Lecturer
Collaborator Nobuo Kurata, Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University, Professor
Kiyoshi Furusawa, College of Science, Rikkyo University, Specially Appointed Associate Professor
Kenichi Hara, Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, postdoctoral fellow

研究概要

本研究では、演劇の専門家と協働することで、新しい科学技術コミュニケーションの手法である先端科学技術の社会実装をテーマとした対話劇を実際に設計し、劇場等で上演することで科学技術の利用の是非に関する市民参加型の熟議空間の実践を試みる。演劇を用いたコミュニケーション実践の効果については、市民の議論後のアンケートやインタビュー、議論の会話分析などを用いて、参加者の先端科学技術に対する受容態度の変容に与える効果を分析する。その一方で、演劇の専門家が演劇を制作する過程を参与観察することで、実践プロセスを反省的に捉え直すことを試み、演劇制作プロセス自体が、先端科学技術の社会実装の対話のあり方に与える影響や、演劇の専門家と科学技術コミュニケーターという異なる立場のステークホルダー間の協働に与える効果について明らかにする。演劇は歴史的にみても、人文社会科学や民主主義の理念とつながるものである。市民が演劇を観ること、あるいは演じることを通じて、社会の問題を自分のこととして考え、話し合う科学技術コミュニケーションの場が普及することで、成熟した市民社会を確立し、包摂的で持続可能な科学技術の開発・利用の実現を目標とする。